九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

As I Lay Dying試論 : 「言葉」と「行為」の分裂のテーマについて

内田, 智子
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/6786944

出版情報：九大英文学. 31, pp.133-154, 1988-11-20. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

As I Lay Dying 試論

—「言葉」と「行為」の分裂のテーマについて—

内　田　智　子

I

As I Lay Dying (1930) に於て、William Faulkner は登場人物の一人、Addie Bundren に、"[W]ords dont ever fit even what they are trying to say at."[1]また "[S]in and love and fear are just sounds that people who never sinned nor loved nor feared have for what they never had and cannot have until they forget the words." (p. 117) と語らせながら、言語の有効性に対する疑問を表明している 。フォークナーは "unreality of words" で "reality of his work" を作りあげたのだと Bleikasten は言うが、[2] 考えてみれば、言葉の有効性に対する疑問を言葉でもって追求するのは他ならぬパラドックスでもある。言葉の限界を感じていたに違いないフォークナーは、この作品に於てはまず、作品の構成を工夫することによって、彼の考えた「言葉の有効性に対する疑問」のテーマを描いているようである。15人の語り手による59の独白の構成はどう見ても型破りである。そこでまず、この作品に於ける言語の有効性、また言語に対して行為が対極的に占める位置について考えるにあたり、言語以前の、この構成の持つ意味から考察を始めることは無益ではあるまい。

勝手面々が言いたいことを言えば、語り手のフィルターにかけられる間に彼らの語る「真実」は捩じ曲げられ、それぞれの語りの間には矛盾が生じる。登場人物達の思わくはすれ違いを起し、彼らは互いに誤解を持ったまま物語は進む。人間の言葉は如何にあてにならないかということを、フォークナーはまず登場人物の語りを併置することによって示そうとしている。例えば第

6章[3]でCora Tullはバンドレン家の子供達のうちDarlは母アディーを愛しているがJewelは彼女を愛していないと思っており、ダールはアディーが瀕死の時に3ドルを稼ぎに行かせないでくれと頼んだのだ、と信じている(p. 15)。ところが、実際には第5章と第7章を見ると、ダールはアディーが瀕死なのを知りながら、わざとジュエルを母親の死の床から引き離すために仕事に連れて行くことが明らかになる。ダールは母親にいつもかわいがられたジュエルに嫉妬心を抱いていたのである。Millgateの指摘するように、"A major source of ironic, and often comic, effects in *As I Lay Dying* is the frequency with which characters are completely mistaken in their judgments of each other, and of themselves."[4]というわけである。

ダールとジュエルのひそかな敵対関係にも窺われるように、バンドレン家の人々は、夫婦、親子、兄弟であってもその絆は薄い。彼らは皆、断片的な自分自身の語りの世界に閉じ込められており、一家の母であり妻であるアディーが亡くなり彼女の遺志で故郷のJeffersonに埋葬することになると、表面上は一致協力して彼女の葬送に専心しているように見えながら実はダールとジュエルを除いては皆勝手な理由でジェファソンに行っているというのが実情である。Anseは入歯と新しい妻を、Dewey Dellは堕胎薬を、Cashは蓄音機、Vardamanはオモチャの汽車を手に入れるのがジェファソンへ行く大きな目的である。そこでVickeryの言うように、"In reality . . . the journey from beginning to end is a travesty of the ritual of interment."[5]ということになる。

こうして、語りの断片に閉じ込められたバンドレン家の人々は、とにもかくにもアディーの葬送行に加わって行くのだけれども、葬送の本来の意味と、彼らの履行する形式の間にはいつもギャップがあるというのが本当のところである。形式とその意味という関係は、「言葉」と「行為」の分裂というテーマに変奏されて、繰り返し登場する。以下、言葉の不確実性とその言葉に対する行為の意義について考察を加える。

II

『死の床に横たわりて』には、偽善的な言葉のみを盾にとり、行為がこれに付随せぬ人々が幾人か登場する。彼らは激しく言葉の限界と偽善的な側面を我々に見せ付ける。アディーの夫、アンス・バンドレンはその一人である。アディーは彼の自分への愛情が、口先だけなのを知って、彼に失望した。

> He had a word, too. Love, he called it. But I had been used to words for a long time. I knew that that word was like the others: just a shape to fill a lack; that when the right time came, you wouldn't need a word for that anymore than for pride or fear. . . . I would say, Let Anse use it, if he wants to. So that it was Anse or love; love or Anse: it didn't matter. (p. 116)

さてそのアンスは一見、恰も旅の途上の度重なる困難をじっと耐えているかのように見せかける。しかし実際は、彼は自分では何もせずに息子達に犠牲を強い、その一方で自己憐憫に浸っている。"Was there ere a such misfortunate man."(p. 105)なる言葉は彼の口癖である(cf. pp. 109, 110, 127, 128)。彼は旧約のヨブのパロディーのようにも見える。しかし、最後にヨブが悔い改めたのに対し、アンスにはその気配は微塵も認められない。彼は心ひそかに、街へ行って歯が入ることを喜ぶのである。

> I am the chosen of the Lord, for who He loveth, so doeth He chastiseth. But I be durn if He dont take some curious ways to show it, seems like.
>
> But now I can get them teeth. That will be a comfort. It will. (p.71)

アンスについては、Brooks が、"Faulkner's most accomplished villains"

の一人であると述べ、[6] ブレイカスタンも彼の意見を支持する見解を述べている。[7] アンスは口先だけの男であり、誠意がなく、その結果彼はアディーの絶望を、ひいては彼女の葬送の際の家族それぞれの犠牲を引き起すもととなる。言葉だけで中身のない彼はどう見ても悪人なのである。ところが、一つ付言せねばならぬのは、フォークナーの悪人アンスの描き方は実に巧みであるということである。フォークナーは彼を、ブレイカスタン言うところの "outrageous humor"[8]とでも言うべきものでもって描く。そのため、彼は言葉の偽善性を体現する人間であるけれども、同時に一面的でなく奥行のある、興味深い人物に仕立てられている。アディーが亡くなった時、彼は歯のない口に嚙煙草を含んで "God's will be done . . . . Now I can get them teeth." と言うのだとダールは想像する (p. 35) が、この姿に、我々はある種のおぞましさを感じながらも、思わず苦笑せずにはいられない。彼の隣人、Armstid の言う、"I be durn if Anse dont conjure a man, some way. I be durn if he aint a sight." (p. 130) というのは真に的を得たアンス評である。

口先だけの人物でまた興味深いのはコーラ・タルである。コーラは何かというとバンドレン家に出掛けては力を貸す。ところがコーラのすることは全て義務 (彼女は "my Christian duty" (p. 45) と呼ぶ) でなされているために、彼女が親切にしている人と、彼女との間に、人間的な感情の行き交うことがない。デューイー・デルはそんな隣人の一家を"old turkey-buzzard Tull" (p. 19) と呼ぶ。彼女は多くの事実関係を誤認して、それを厳然たるものとして受け入れているから、彼女には他人の情況や心痛は判らない。ヴィカリーは、彼女について、"Having learned her ethics by rote, Cora has no difficulty in affixing praise and blame or in predicting salvation or damnation for all whom she meets."[9]と述べている。例えば、母親の死にショックを受けたヴァーダマンが、雨の中ずぶ濡れになって彼女の家に来、母と魚を混乱させて魚の話ばかりすれば、彼女は言う、"It's a judgment on Anse Bundren. May it show him the path of sin he is a-trodding." (p. 47)。また、アディーがホイットフィールドと姦通をし、その結果出来た子供がジュエルだということに気が付きもしない彼女が、"Just because you have been a faithful wife is no sign that there is no sin in your heart . . . . "

(P. 112) と言って罪の悔い改めを迫るのは強烈な皮肉である。一体彼女は「信仰深い」人間であるのだが、彼女の信仰はパリサイ人や律法学者達のそれの如く、教義の字面の意味に捕われ、その本来の意味を探ろうとすることがない。彼女は、"It is out of your vanity that you would judge sin and salvation in the Lord's place." (p. 112) と言う。これは尤であるのだが、次のページで彼女はアディーに向かって "There is your sin." (p. 113) と言って彼女自身が罪の宣告をする。彼女は、自分自身の言ったことすら、自分では実践できずにおり、しかもそれに気が付かない。彼女が神意を自分に都合の良いように解釈する (アンスがそうであり、また後述するようにホイットフィールドがそうであるのだが) のは、彼女の夫 Vernon Tull の次の言葉からも判る。

> I reckon if there's ere a man or woman anywhere that He could turn it all over to and go away with His mind at rest, it would be Cora. And I reckon she would make a few changes, no matter how He was running it. And I reckon they would be for man's good. Leastways, we would have to like them. Leastways, we might as well go on and make like we did. (p. 48)

自分の価値基準を何にでも当て嵌める彼女に、他人の心情は判るべくもないであろう。"He [God] alone can see into the heart . . . . " (p. 112) と彼女は言うが、彼女自身がそれを証明することとなった。彼女のことをアディーは、"[P]eople to whom sin is just a matter of words, to them salvation is just words too." (p. 119) と言う。

また口先だけの人間のカテゴリーには、ホイットフィールドも入れることができる。フォークナー自身ははっきりと認めないようだけれども、[10] ホイットフィールドは明らかに Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) に登場する Arthur Dimmesdale のパロディーである。両者共人々に徳の高い牧師と信じられているのだが、こともあろうに人妻と通じて罪の子を儲ける。ディムズディルの子が "Pearl"、ホイットフィールドの子が "Jewel" であると

いうのも興味深い類似である。[11] ところが、ディムズディルが物語の終りで、悩み抜いた挙句に人々の前で罪を告白したのに対し、ホイットフィールドは罪を告白する必要を感じながらも遂にそれをなすことがない。言葉が意味を持つためには、その形式としての言葉に見あう行動を為すことが必要となるであろう。折しも、『ローマ人への手紙』には、「人は心に信じて義とされ、口で告白して救われる」[12] とある。ところがホイットフィールドは告白せず、それで神の御心に適ったと必死で言訳をする。アディーが瀕死であると聞いたホイットフィールドは、増水で橋が流れた川を渡って彼女の家へ赴く。彼は告白しなければと思う一方、自分の言う言葉を考えただけで、もう告白したのと同じだと感じたりする。

> I knew then that forgiveness was mine. The flood, the danger, behind, and as I rode on across the firm earth again and the scene of my Gethsemane drew closer and closer, I framed the words which I should use. I would enter the house; I would stop her before she had spoken; I would say to her husband: "Anse, I have sinned. Do with me as you will. "
>
> It was already as though it were done. My soul felt freer, quieter than it had in years; already I seemed to dwell in abiding peace again as I rode on. (pp. 120–21)

タルの家迄来た時、ホイットフィールドはアディーが既に亡くなったことを聞く。すると彼はこれで恐れていた告白をせずに済むと思い愈々ほっとして、自己正当を始める。

> I have sinned, O Lord. Thou knowest the extent of my remorse and the will of my spirit. But He ［ブルックスはここで二人称から三人称になったのは意味深いと指摘している。[13]］is merciful; He will accept the will for the deed, Who knew that when I framed the words of my confession it was to Anse I spoke

them, even though he was not there. (p. 121)

もともとホイットフィールドには告白するつもりがあったのか？ 彼には「言うつもりの」言葉の形骸だけがあって、それを行為に移すことはしなかった。彼は告白をしなくても、自分の言葉を行為の代りに神が受け入れ給うと自分に都合の良いように解釈を下す。彼の言葉と行為の分裂については、タルが良く表現してみせている。説教の時のホイットフィールドの声は本人より大きい、とタルは言う。

> Whitfield begins. His voice is bigger than him. It's like they are not the same. It's like he is one, and his voice is one, swimming on two horses side by side across the ford and coming into the house, the mud-splashed one and the one that never even got wet, triumphant and sad. (p. 59)

ディムズディルとは対照的に、ホイットフィールドは告白をせずに自己正当をして、形骸化した言葉という偽善の仮面をつけたままなのである。

III

さて、アディー・バンドレンは形式としての言葉のみに心を奪われたこれら三人——アンス、コーラ、ホイットフィールド——と対極的な位置にいる。言葉の信用性について疑問を投げかけるのは彼女であり、彼女のただ一つの独白がコーラとホイットフィールドの語りに狭まれているのは彼女の、言語の不確実性に対する感慨を際立たせるのに効果的である。

アディーはアンスと出会う前、教師をしていた。その当時から彼女は、人生はただ生きるだけでなく死ぬ前に何か生きた証となるものを具体的に残すものであると確信していた。彼女は言う、"I could just remember how my father used to say that the reason for living was to get ready to stay dead a long time." (p. 114)。

そこで彼女は自分の教え子達がしくじるのを待っては、その子達を血が流れる程鞭打っていた。こうして、彼女は彼らの中に自分の生きた証を刻み込もうとする。彼らをぶちながら、彼女は考える。"Now you are aware of me! Now I am something in your secret and selfish life, who have marked your blood with my own for ever and ever" (p. 114).[14]

そんなアディーが言葉が空しいと悟り出すのはアンスと結婚して初めての子供が出来てからであった。彼女にとって生きる目的とは、確固とした生きた証を残すことであり死ぬための準備をすることでなければならぬ。ところが言葉のみに生きているアンスとの結婚はその目的と満たしてはくれなかった。

> So I took Anse. And when I knew I had Cash, I knew that living was terrible and that this was the answer to it. That was when I learned that words are no good; that words don't ever fit even what they are trying to say at. (p. 115)

生徒をぶってまで彼女の求めたものは、ブルックスも言うように何らかの種類の "communion" であろうけれども[15] (実は彼女には生きた家族、親戚が一人もいなかった(p.115))、アディーとアンスという二人の間には "communion" はない。アディーは行為を、アンスは言葉を其々代表し、この二つは嚙み合わない。キャッシュを出産するという行為によって一度破られた孤独はまた全きものとなる。"My aloneness had been violated and then made whole again by the the violation: time, Anse, love, what you will, outside the circle" (p. 116). 続いて二番目の子、ダールが生まれた時、彼女はアンスに騙された気がした(p. 116)。ダールは、「言葉だけの愛の絶望的証明」[16] なのであった。彼女がこの時、自分が死んだらジェファソンに埋葬してくれと頼むのは、言葉のみで生きているアンスに復讐するためである。アンスが彼女の言葉を表面だけでとり、葬送行の本来の意味を忘れ、如何に痛ましいことになろうとも旅を強行することを見抜いた上での作戦なのであった。

情熱的に生きる証を求める彼女にとって、アンスとの不毛な結婚に蔓延す

る言葉と行為の分裂は深刻な問題であった。彼女はこの2つの分裂を次のように表明する。

> [W]hen Cora Tull would tell me I was not a true mother, I would think how words go straight up in a thin line, quick and harmless, and how terribly doing goes along the earth, clinging to it, so that after a while the two lines are too far apart for the same person to straddle from one to the other; . . . . (p. 117)

そこで悩み抜いた彼女に残されたのは唯一つ、あらゆる abstract な言葉を排除して自分にとっての concrete fact、行為に専念することであった。これが非道徳的であっても構わない。こうして彼女はホイットフィールドとの姦通の罪に堕ちてゆく。彼女にとっては、行為に固執するためなら罪も恐るるに足らぬものであった。言葉と行為の意味を探り尽くした末、自らの身の破滅も辞さずに反抗的な自我を通す彼女の姿は、*Moby-Dick* の Ahab 船長を思わせるところがある。[17] 罪に、彼女は自分の人間性を発揮できると思っているのである。

さて、"the Word"と言えばまず連想されるのは、「初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。(ヨハネによる福音書1：1)」[18] というキリストである。コーラを批判してアディーが、"[P]eople to whom sin is just a matter of words, to them salvation is just words too." (p. 119) と言ったことからも判るように、彼女が何らかの形の "salvation" を求めていたことは間違いない。しかし彼女の求めていたのは如何なる意味に於ても正統的なキリスト教の救いではなかった。彼女はホイットフィールドとの姦通が罪であること、そのために罰を受けなくてはならないことも承知している。"I know my own sin. I know that I deserve my punishment. I do not begrudge it" (p. 112). しかし彼女はそのために神に許しを乞うことをしなかった。彼女は自分の罪に気付きながら神に救いを求めることがない。実はこれこそが最大の罪であるのだけれども、彼女は自ら進んでその情況に身を置くのである。つまり Palliser の言うように、" [S]he is expressing her

contempt for the Word in the sense of the Logos or Providence which is being defied by her adultery."[19]ということになる。つまり、彼女の父の言葉に見られる死の obsession のために、彼女にとっては自分の行為が全てで神の救いなどは拒否すべきものであった。彼女は形式としての言葉、言語に反感を抱いただけでなく、「御言葉」である神をも拒絶したことになる。

彼女の反抗は、不倫の子ジュエルを産んで漸く収まった。

> With Jewel —— I lay by the lamp, holding up my own head, watching him cap and suture it before he breathed —— the wild blood boiled away and the sound of it ceased. (p. 118)

彼女は言葉を拒否した。言葉が形骸化されれば、前に見たように、それはそれで問題である。しかしだからといって行為に固執すれば、今度はまた新たな問題を生むであろう。だから、アディーの反抗はこれで収まっても、彼女がこれ程言葉と行為の分裂について悩んだことはこのままでは収まらなかった。彼女の子供達のうち、彼女が受け入れたのはキャッシュとジュエルだけであり、ダール、ヴァーダマン、デューイー・デルは「アンスのものであって自分のものではない」(p. 119) と拒否する。彼女のこの態度はこのまま子供達の成長後の態度に反映されてゆく。アディーがダールを産んだ時仕掛けた、彼女のジェファソンへの葬送行は、彼女の子供達にどのような影響を及ぼしてゆくのか。これから、彼女の子供達のうち、ジュエルとダールについて、彼らの葬送行に於ける態度について考察する。

IV

ジュエルはアディーの不義の子であり、アディーが abstract な言葉を否定して行為に固執した結果生れた子であることは既に述べた。アディーのこの態度は、そのままジュエルに引き継がれたと言って良い。ブルックスは、"Jewel is the high-strung man of action, impatient, ardent, flamboyant, and heroic, but only in some kind of terribly brainless way."[20] と言っている

が、ジュエルは言葉を持たない行動の象徴であり、何も考えずにただひたすら行動する。疑うことを知らないジュエルは自分の identity に関する疑惑を自分で考えることがない。その点でも彼はダールと対照的である。ダールは "I dont know what I am. I dont know if I am or not. Jewel knows he is, because he does not know that he does not know whether he is or not." (p. 52) と言っているのである。アディーはコーラに、"He [Jewel] will save me from the water and from the fire. Even though I have laid down my life, he will save me." (p. 113) と語ったことがあったが、ジュエルがアディーの棺を洪水と火事から救い出すに及んで、このことは実現する。ジュエルは、母親の代りとして異常な程かわいがっていた馬（ダールはこのことについて、"Jewel's mother is a horse." (p. 61) と言う）を、旅の途中で手放すことを余儀なくされる。しかしそういう犠牲を払っても、これが母親の望みであると信じ、彼は彼女の棺をジェファソンへ運ぶ。母親の死体が死後幾日も経ってハゲタカがついて来ても、彼は行動を起こす。如何なる困難をものともしない彼の行為は一面確かにヒロイックである。[21] しかし、良かれと思ってしていることであっても、彼の行為への固執はまた、その極端さの故に、妥当性を問われるものでもある。彼が洪水で溢れた川を無理に渡ろうとする時の言動はこのことを如実に物語っている。

> Jewel watches me [Darl], hard. He looks quick at Cash, then back at me, his eyes alert and hard. "I dont give a damn. Just so we do something. Setting here, not lifting a goddamn hand. . . ." (p. 96)

さて、ダールとジュエルのひそかな敵対関係については、この論文の最初の方でも言及したけれども、実際、この二人はあらゆる面で対照をなす。Jewel は母親の偏愛を受けて育ったのにダールはアディーに愛されることがなかった。ダールを孕んだことは騙し打ちにあったことだとアディーは考えた (p. 116)。そこでダールも "I cannot love my mother because I have no mother" (p. 61) と、その孤独を表明する。ブレイカスタンは、"Jewel is everything Darl

is not. While Darl is mere passive perception, Jewel is pure violence . . . . ."[22] と述べているが、ジュエルが極端な行為を表わすとすれば、ダールは行動より観察を重視したタイプと言える。ダールは行動を起こせない自分に比べて、行動の起こせるジュエルが羨ましく、嫉妬を持って彼を観察するのである。[23]

ダールには殆ど「千里眼」と呼んでもいいような、物を見通す力がある。アディーの不倫、デューイー・デルの妊娠、ジュエルの馬はアディーの代りであること、を知っているのはダール一人である。しかし、彼のものを見通す力が超能力的なものであるかどうかは疑ってみる必要がある。パリサーは、ダールの perception は何も超能力的なものではなく、極端なカルヴィニズムの予定説的な vision に起因するものであるという。つまり、人間の行動は過去の結果として定まっており、ダールは人間の宿命の仕組みを完全に受け入れているというのである。ただ、パリサーも認めていることであるが、この場合、ダールが何らかの神学的な意味で "predestination" を信じているのではない。[24] 彼が神を信じていたかは非常に疑わしい。ただ、ダールは過去を避け難い力として捕え、それを踏まえた上で家族の運命や秘密を理知的に推測するのである。パリサーは言う、

> Darl actually has no supernatural gifts and there is a rational explanation for his supposed clairvoyance; all that he knows is the result of guesswork based on his knowledge of the past.[25]

一つ例をとってみよう。ジュエルが小さい頃からかわいがられていたことを述べたあと (pp. 12–13)、ダールは第32章でそれまで語り継がれて来た葬送の話をぷっつりとやめ、過去を思い出してその出来事を語る。アディーは時々、自分のかわいいジュエルの側で夜泣いていることがあった。

> [A]t times when I [Darl] went in to go to bed she would be sitting in the dark by Jewel where he was asleep. And I knew that she was hating herself for that deceit and hating Jewel

because she had to love him so that she had to act the deceit. (p. 84)

ジュエルは家の者に黙って夜一人で働き、馬を手に入れるが、彼が馬を連れて帰った夜も、アディーは眠っているジュエルの側でさめざめと泣く。このアディーの異様な反応を見て、ダールは初めてジュエルがアディーの不義の子であることを悟るのである。

She cried hard, maybe because she had to cry so quiet; maybe because she felt the same way about tears she did about deceit, hating herself for doing it, hating him because she had to. And then I knew that I knew. I knew that as plain on that day as I knew about Dewey Dell on that day. (pp. 88-89)

このように、ダールは過去の出来事を悉さに論理立てて考え、それをさらに自分の鋭い観察と合わせて秘密を見通すのである。ダールのこの思考と視線については、タルの非常に興味深い意見がある。まずダールの鋭い視線について、彼はこう言う。

He is looking at me. He dont say nothing; just looks at me with them queer eyes of hisn that makes folks talk. I always say it aint never been what he done so much or said or anything so much as how he looks at you. It's like he had got into the inside of you, someway. Like somehow you was looking at yourself and your doings outen his eyes. (p. 81)

またタルは、ダールが考え過ぎるのだと言う。"I have said and I say again, that's ever living thing the matter with Darl: he just thinks by himself too much" (p. 47).

さて、このダールは物語の仕舞で Jackson にある精神病院に送られる。ダ

ールが「ジャクソン行き」となったのは、直接にはGillespieの家畜小屋に放火をしたためである。確かにダールの最後の語り(第57章)では、彼は完全に自己分裂を起こしてしまっており、自分のことはもはや "I" ではなく"Darl" と呼ぶ。つまり自分自身が三人称になっているのである。"the dedicated observer, the habitual spectator"[26] であり、かつ過去を沈思して人の秘密を見通すダールにはものが見えずぎてしまい、現実の醜悪さのみが彼の前に突き付けられる。こうして最後にダールは完全に狂気に至るのである。だがここで問題となることがある。一体、完全な狂気に至る前の彼の言動を見て、ダールだけが初めから狂っていたと断定して良いものかどうかということである。フォークナー自身は、ダールがずっと狂っていたのか、それとも本の中で起った出来事の結果気が狂ったのかという質問に対して、"Darl was mad from the first. He got progressively madder because he didn't have the capacity —— not so much of sanity but of inertness to resist all the catastrophes that happened to the family."[27]と述べている。しかし果してそうであろうか。そして一体もしダールが "mad" なら、"mad" なのはバンドレン一家のうちダール一人と言って良いのであろうか。フォークナーは同じインタヴューの中で非常に曖昧な言い方をして、"Jewel resisted because he was sane and he was the toughest."[28] と述べたかと思うと、"He [Vardaman] was a child trying to cope with this adult's world which to him was, and to any sane person, completely mad. That these people would want to drag that body over the country and go to all that trouble, and he was baffled and puzzled."[29] と述べている。彼はジュエルを "sane" だと言っているが、アディーの遺体をジェファソンに運ぶのに最も活躍したのはジュエルではなかったか。そして彼は遺体を運ぶことは "completely mad" だと言うのである。

本論文では、言葉の有効性が『死の床に横たわりて』に於て如何に大きな問題であるかということを論じてきた。そして正気と狂気の区別の問題も、この言葉の有効性、信頼性という問題と深く関っているのである。一体何が狂気で誰がそうと決めるのか。最後にこの問題について考察を加えてみたい。

V

フォークナーにとって、sane／insane という問題は実に恣意的なものである。彼は *The Sound and the Fury* (1929) の "Appendix: the Compsons" ("Appendix"は1946年に発表) に於て、姪の Quentin を執拗に追い回し、ちびちびと小銭を溜めては夜、金を数えている Jason を、"The first sane Compson since before Culloden and (a childless bachelor) hence the last."[30] と呼んでいる。また、先に引用した University of Virginia に於けるインタヴューに於ても、彼が "sane" や "mad" という言葉を使う時、それらが conventional な字面の意味で用いられていないことは明らかである。『死の床に横たわりて』では正気／狂気の問題は第53章のキャッシュの語りでクローズ・アップされる。彼は大工であり、アディーの棺桶を作る時もバランスに一番気を使う。これはキャッシュがただ物理的な釣合に心を砕いているだけではなく、この一家の中で唯一人、極端に violent な行為に走るジュエルと、ただ観察と思索に徹するダールの丁度釣合をとった位置にいるということにも通じていよう。ダールが遂に「ジャクソン行き」となった後、この小説の語りのアンカーを務めるのはキャッシュである。彼の最後の 2 つの語り (第53、59章) はいわばこの物語の conclusion にも当るものである。ここに至って初めて、言葉と行為の分裂というこの小説の大きなテーマは一つの解決を見ることになる。「言葉」と「行為」のどちらかに傾くことは危険である。彼は言葉と行為のバランスをとった語りをする。キャッシュは始めこそ黙々と棺桶を作るだけの男であるが、脚を折るという艱難を受けた後に言葉を得、遂に是迄の出来事に一つの結論を下すのである。ヴィカリーはキャッシュについて、

> The twice broken leg and the pain which he accepts without protest . . . pave the way for the extension of his range of awareness and for his increased sensitivity both to events and to people.[31]

と言っているのである。

さて、家畜小屋に放火したダールを狂人と決め付けることについて、このキャッシュは疑問を表明している。アディーの遺体は死後9日を経てやっとジェファソンに埋葬された。一体アディーの遺言とは言え、9日間もかけて、夏の最中に、多大な犠牲を払ってまで死臭を放つ遺体を運ぶ事は許されることであろうか。だから、アディーの棺を燃やそうとして家畜小屋に火をつけたことはある意味で正しいことであるのかもしれない。キャッシュはこう言う。

> I thought more than once before we crossed the river and after, how it would be God's blessing if He did take her outen our hands and get shut of her in some clean way, and it seemed to me that when Jewel worked so to get her outen the river, he was going against God in a way, and then when Darl seen that it looked like one of us would have to do something, I can almost believe he done right in a way. (pp. 157–58)

キャッシュだけではない。死臭を放つアディーの遺体を運んで行くことが如何に死者への冒瀆となり得るかということは、バンドレン家以外の人間はすぐに気付くことである。Samson の妻 Rachel、Armstid の妻 Lura は共にアディーに同情し、"It's a outrage . . . ." (pp. 75, 126) と言って憤慨するし、サムソンも次のように言う。

> I got just as much respect for the dead as ere a man, but you've got to respect the dead themselves, and a woman that's been dead in a box four days, the best way to respect her is to get her into the ground as quick as you can. But they wouldn't do it. (p. 75)

バンドレン家の人々は、アディーの遺体を埋めるという約束を果すように見せかけて、実は入れ歯とか堕胎薬とかを手に入れるために街に行くことに固執する。ダールは最後にジャクソン行きの汽車に乗せられ、その一方で彼らは道の真中で一家でバナナを食べている。一体これはどちらが狂気なのであろうか。

キャッシュは、正気と狂気は紙一重で、他人がどう判断するかにかかっている、と言う。

> Sometimes I aint so sho who's got ere a right to say when a man is crazy and when he aint. Sometimes I think it aint none of us pure crazy and aint none of us pure sane until the balance of us talks him that-a-way. It's like it aint so much what a fellow does, but it's the way the majority of folks is looking at him when he does it. . . . And I reckon they aint nothing else to do with him but what the most folks says is right. (pp. 157–58)

これは一面、非情な意見でもある。ダールがジャクソンに送られる時、ダールが "I thought you would have told me," (p. 160) と言ったのに対し、キャッシュは、"It'll be better for you . . . . Down there it'll be quiet, with none of the bothering and such. It'll be better for you, Darl . . . ." (p. 161) と突き離すのである。しかしキャッシュにどのようなことが他にできたであろうか。キャッシュにはダールの気持も判るし、何が狂気で何が正気か簡単に決められぬことも知っている。しかしそれを決めるのは社会的な基準、他人がどう言うか、ということにかかっており、そのためこういう判断を下さぬわけにはいかないのである。キャッシュは、"I dont reckon nothing excuses setting fire to a man's barn and endangering his stock and destroying his property. That's how I reckon a man is crazy." (p. 158) と言う。しかし放火も狂気なら葬送を続行することも負けない位狂気なのである。ダールに関して、結局キャッシュはどの人間にも正気の部分と狂気の部分とがあるのだと結論づける。

> But I aint so sho that ere a man has the right to say what is crazy and what aint. It's like there was a fellow in every man that's done a-past the sanity or the insanity, that watches the sane and the insane doings of that man with the same horror and the same astonishment. (p. 161)

さて、ここでこの小説が59の語りのみで構成されていたことを思い起すと、ある人物が正気であるかどうかが社会的判断にかかっているということは大きな意味を持つ。客観的視点がないため、ある人物の行為は他の人物の目を通して語られ、そのうちにその人物の行為が果して正気のものか狂気のものかは極めて恣意的なものとならざるを得ないからである。ここに於て正気／狂気の問題が言語の妥当性と結び付く。一体人間の言葉はあてになるのか。もし大多数が間違った見方をするならどうなるのか。ヴィカリーも言うように、"Action, the basis of individual moral conduct, is subject to social judgments and these are implemented through language"[32] であるのである。

フォークナーにとっても、これは非常に大きな問題であった。*Light in August* (1932) では、コミュニティから疎外された Joe Christmas が、実際のところは判らないにもかかわらず、「黒人」と一方的に決め付けられ、リンチにあわされかかる。『八月の光』第15章では、Mottstown の一市民が "anonymous narrator" として登場し、クリスマスに関するでたらめの話を捲し立てる。人々はこのでたらめな話に代表される根のない噂話を信じて、クリスマスのリンチに駆り立てられるのである。[33] フォークナー自身、『八月の光』では地の文で登場して言う。"Man knows so little about his fellows. In his eyes all men or women act upon what he believes would motivate him if he were mad enough to do what that other man or woman is doing."[34] (この文章でも "mad" という言葉は字面の意でとられてはなるまい)。

ダールもまた、何が正気で何が狂気か明らかにされぬまま (この物語で正気と狂気の区分は恣意的であると気付くのはキャッシュ一人である)、「放火」

の事実のみで「ジャクソン行き」となる。最後57章で確かに自己分裂を起して気が狂うダールを、決定的に気違にしたのは誰だったのか。葬送行を強行した、バンドレン家の他の「正気な」者達ではなかっただろうか。こうして、『死の床に横たわりて』に於てフォークナーは、「言葉」と「行為」の問題に絡ませて、フォークナーの他の作品にも繋がる、登場人物間の誤解のテーマをも展開しているのである。

是迄我々は、アディーが悩み抜いた、「言葉」と「行為」の分裂の問題について考察してきた。彼女が悩んだことは、彼女が死んでからも種々な副産物を残した。Dr. Peabody は長い間、生と死を見詰める医者の立場にあって、死がただの肉体上の現象ではないことに気付いていた。

> I can remember how when I was young I believed death to be a phenomenon of the body; now I know it to be merely a function of the mind —— and that of the minds of the ones who suffer the bereavement. (p. 29)

実に、アディーの肉体は死んでも、ジェファソンの墓地に葬られるまで、様々な形で彼女の家族の上に影響を及ぼし続けた。ある者は脚を折り、ある者は大事な馬を手放した上に火傷を負い、またある者は狂気に至る。しかしこれらのこと全ての底に、アディーが生前悩み抜いた、「言葉」と「行為」の分裂の問題がある。彼女の悩んだ「言葉」と「行為」の分裂の問題が、彼女の死を通して様々に拡大されるのを見るにつけ、我々は改めてこれがどれ程深刻な問題であるのか、考えずにはいられない。

Notes

1 William Faulkner, *As I Lay Dying* (1930; rpt. in *Novels 1930—1935*, ed. Joseph Blotner and Noel Polk; New York: The Library of America, 1985), p. 115. 以下、この作品からの引用は全てこの版により、引用頁は本文中に示す。

2 André Bleikasten, *Faulkner's As I Lay Dying*, rev. and enl. ed., translated by

Roger Little, with the collaboration of the author (Bloomington: Indiana University Press, 1973), p. 137.

3 実際には作品中に章番号が付いているわけではない。本論文では便宜上、以下第○章と呼ぶ。

4 Michael Millgate, "*As I Lay Dying,*" in *The Achievement of William Faulkner* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1978), p. 106.

5 Olga W. Vickery, "The Dimensions of Consciousness: "*As I Lay Dying,*" in *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation,* rev. ed. (Baton Rouge, La.: Louisiana State University Press, 1964), p. 52.

6 Cleanth Brooks, "Odyssey of the Bundrens (*As I Lay Dying*)," in *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (1963; rpt. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1966), p. 154.

7 Bleikasten, p. 85.

8 *Ibid.*, p. 85.

9 Vickery, p. 64.

10 Cf. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958* (1959; rpt. Charlottesville, Va.: University of Virginia Press, 1977), p. 115. フォークナーは『死の床に横たわりて』と『緋文字』のパラレルについて尋ねられ、これを肯定するとも否定するともとりかねるような返答をしている。

11 Harold J. Douglas and Robert Daniel, "Faulkner and the Puritanism of the South," *Tennessee Studies in Literature,* 2 (1957), 1-13; rpt. as "Faulkner's Southern Puritanism," in *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond,* ed. J. Robert Barth, S.J. (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1972), pp. 37-51. には『死の床に横たわりて』と『緋文字』の類似が詳しく論じられている。

12 新約聖書、ローマ人への手紙10:10 (1954; 日本聖書協会, 1982), p. 246.

13 Brooks, p. 151.

14 この異常とも言える彼女の気質はしかし、フォークナーの作品にあっては他に例を見ないものではない。自らの人生に不満を持ち、violence の中にその不満の解決を見出そうとするのは、フォークナーがこの作品を発表した2年後に出版した、*Light in August* (1932)の主人公、Joe Christmas にも見られるものである。彼は自分の相棒の Joe Brown を殴り付けたり、彼の情婦、Joanna Burden に乱暴を加えたりする。ジョアナに乱暴をした後のクリスマスの言葉は、アディーのここの言葉と類似している。"'At least I

have made a woman of her at last,' he thought. 'Now she hates me. I have taught her that, at least.'" (William Faulkner, *Light in August,* 1932; rpt. New York: Random House, 1959, p. 223.)

15 Brooks, p. 149.

16 阪田勝三、「訳者解説」、『フォークナー全集 6　死の床に横たわりて』(冨山房、1974), p. 233.

17 Cf. Hyatt Waggoner, "Vision: *As I Lay Dying,*" in *William Faulkner: From Jefferson to the World* (Lextington: University of Kentucky Press, 1959), p. 82.

18 新約聖書、ヨハネによる福音書 1 : 1 (1954; 日本聖書協会, 1982), p. 135.

19 Charles Palliser, "Predestination and Freedom in *As I Lay Dying,*" *American Literature,* 58 (December 1986), 569.

20 Brooks, p. 145.

21 Cf. *ibid.,* pp. 141-44. ブルックスのこの作品を論じた章は、この作品に於けるヒロイズムについて述べることから始まっている。

22 Bleikasten, p. 91.

23 ダールの語りの中で、まず"he"といきなり登場する場合は、いつもジュエルを指している。さすがに第 1 章の書き出しは、"*Jewel and I* come up from the field, following the path in single file." (p. 3 ; イタリックは筆者) であるが、その後、第 3 、 5 、10、21、23、25、27、32、42、46、50章のダールの語りでは、ダールがまず章の始めや途中で何の脈絡もなく「彼が……」と切り出している。自分の語っているのは他でもない、ジュエルであると内外に強く印象づける語りが繰り返されるにつれて、読者は如何にダールがジュエルを見詰めているかが判るのである。

24 Cf. Charles Palliser, "Fate and Madness: The Determinist Vision of Darl Bundren," *Americam Literature*, 49 (January 1978), 619-33; rpt. in *William Faulkner's As I Lay Dying: A Critical Casebook*, ed. Dianne L. Cox (New York: Garland Publishing, Inc., 1985), pp. 131-43.

25 Palliser, "Fate and Madness," p. 134.

26 Brooks, p. 156.

27 Gwynn and Blotner, p. 110.

28 *Ibid*., p. 110.

29 *Ibid.,* p. 111.

30 William Faulkner, "Appendix: The Compsons," in *The Portable Faulkner*, ed. Malcolm Cowley, 2nd ed. (New York, 1967; rpt. Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books Ltd., 1983), p. 716.

31 Vickery, p. 57.

32 *Ibid.*, p. 60.

33 クリスマスは Percy Grimm に殺されたのであって、リンチに会うわけではないが、彼をリンチにかけようとする、コミュニティの雰囲気はあった。『八月の光』に於ける個人とコミュニティの相克の問題については、拙論 "Aspects of Life in *Light in August:* Three Tragedies and a Comedy" (九州大学大学院文学研究科修士論文、1988年1月)、第2章第2節に詳説した。

34 William Faulkner, *Light in August* (1932; rpt. New York: Random House, 1959), p. 43.